

目的 農業生産過程の機械化、若年労働の地域外流出、あるいは、流通機構の発達などの諸条件によって、「むら」共同体の体質までも変わってきたといわれている。事実そうであるならば、個々の「いえ」本来の生活様式に、どの程度、その影響が与えられているだろうか。指標として、正月行事食をとりあげ、その変容状態をさぐることにした。

方法 県内に居住する本学学生の母親187名(年齢40~50才、核家族58%、舅・姑との同居家族42%)を対象に、「おせち料理」・「正月雑煮」の材料・調味料構成、作り方などについて調査を行った(昭和52年1月)。

結果 個々の「いえ」の特徴を、主人系の家風(主婦が嫁ぎ先の様式に従う場合)、主婦系の家風(主婦の生家の様式に従う場合)に大別すると、「おせち料理」については、ほとんど両者の家風の差はみられなかった。

「正月雑煮」にあつては、いずれかの家風がのこっているように思われた。同居家族の場合、ほとんど「主人系の家風」に従っていて、核家族では、「主人系」・「主婦系」の家風が同じ程度であつた。地域性のうすらいだと思われるような地域ごさえむ、同様なことが認められた。

「むら」全体の一つの現象としてとらえるならば、様式に変化が生じたかに見えるものも、個々の家庭では、本来の様式が存在しているように思われた。